

列島再生

第2部「新たな国土づくり」

「ご近所以上 家族未満」 第4章 「住み方」の転換 2

夕暮れの東京・多摩市。窓にあかりがともる低層マンションから、笑い声が漏れていた。

みそ汁のいい匂いが漂う1階の大食堂では、大橋徹平さん(38)、佳奈さん(28)夫妻が20枚以上の皿に魚を盛りつける。3月に生まれたばかりの咲菜ちゃんをあやしているのは、城島康子さん(76)。実のおばあさんのようなが、血はつながっていない。「忙しくて、ボケませんよ」と笑う。

「ここはNPO法人が仲介する集合住宅「コレクティブハウス」。風呂とトイレ、台所付きのプライベート空間はあるが、食堂や洗濯スペースなどは共有する。管理・運営を居住者全員で行うのが特徴で、共有空間の掃除、炊事、家庭菜園の水やりなどは持ち回りだ。



NPO法人「コレクティブハウジング社」の仲介する「コレクティブハウス聖蹟」で子どもたちと遊ぶ城島康子さん(左)。共有キッチンで夕食の準備が進む。鷹見安浩撮影

「ここに暮らす17世帯28人は、いわば「ご近所以上家族未満」。血縁ではなく、自分の意思で選択した優しいつながりを求めて、単身の高齢者から子育て中の若夫婦まで、様々な年代が集う。

城島さんは40年暮らした大阪の一軒家を引き払い、昨年10月に一人で入居した。夫とは7年前に死別。大阪には友人も多かったが、古希を過ぎ、万が一のことも考えて息子の住む東京への引っ越しを決めた。

だが、息子との同居は頭になかった。「自由な時間を持たたいし、元気なうちは自立して欲しい」。悩んだ末に選んだのが今の「家族」との生活だった。

ただ、こうした高齢者の願いを実現させる場所は、まだ少ない。「日本では老人ホームなど介護施設は増えてきたが、元気な高齢者が単身で生活するための支援は遅れている」。みずほ情報総研の藤森克彦主席研究員はこう指摘する。

国立社会保障・人口問題研究所の推計では、18年後の2030年、日本は約3分の1が65歳以上の高齢者で、このうち2割が単身となる。これに対し、現状ではバリアフリーなどを整備した高齢者向け住宅は、高齢者人口の1・5%(08年)しかなく、その割合はデンマークやイギリスの5分の1程度だ。国は20年までに高齢者向け住宅を3・5%に引き上げたい考えで、昨年10月からは、安否確認なども行う「サービス付き高齢者向け住宅」の推進にも着手した。

だが、高齢者の自立は孤立と紙一重だ。「ハードの整備だけでは、『人のつながり』までは作れない」と、東大で高齢者問題を研究する辻哲夫特任教授は話す。

高齢者を対象にした内閣府の意識調査(05年度)では、一人暮らしの男性の24%が近所づきあいがなく、17%は心配事の相談相手もいなかった。

地縁や血縁を切り捨ててきた現代社会。それでも、人は絆を必要としている。「桜吹雪の頃、埋葬されたいなあ」「暑い時期はいたいやね」。5月10日、都内の同じ霊園に自分の墓を購入したり、購入を考えたりする「墓友」の男女6人が、将来の話に花を咲かせている。NPO法人「エンディングセンター」の取り組みだ。

辻さんは「超高齢社会を支えるのは人と人とのつながり。失われつつある絆に代わるものを、仕掛けてでも作らなければ」と話す。

だが、高齢者の自立は孤立と紙一重だ。「ハードの整備だけでは、『人のつながり』までは作れない」と、東大で高齢者問題を研究する辻哲夫特任教授は話す。

高齢者を対象にした内閣府の意識調査(05年度)では、一人暮らしの男性の24%が近所づきあいがなく、17%は心配事の相談相手もいなかった。

地縁や血縁を切り捨ててきた現代社会。それでも、人は絆を必要としている。「桜吹雪の頃、埋葬されたいなあ」「暑い時期はいたいやね」。5月10日、都内の同じ霊園に自分の墓を購入したり、購入を考えたりする「墓友」の男女6人が、将来の話に花を咲かせている。NPO法人「エンディングセンター」の取り組みだ。

辻さんは「超高齢社会を支えるのは人と人とのつながり。失われつつある絆に代わるものを、仕掛けてでも作らなければ」と話す。